

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## 音楽事典に名を残す 日本の音楽家

今回は武満徹さんのことをお話ししましょう。

1930年生まれ、1995年に亡くなられましたが、現在もお、世界にその名が知られている、日本をまさに代表する作曲家だからです。

### ドイツの音楽事典

手元にある全20巻から成るイギリスが発売元の「ニューグローヴ世界音楽大事典」の日本語版、その総ページ数はざっと1万3000ページあり、細かいところでは速度記号、音楽史的には古代から現代まで、音楽にかかわるあらゆる項目がほぼ網羅されています。そこに日本人音楽家は何人取り上げられているのかを、400ページに及ぶ「索引」巻でざっと数えてみました。100人ほどで、その中にはドイツ留学をした山田耕作も滝廉太郎なども、日本音楽史を飾る人々の名があるのですが、ただ多くの人はおそらく日本語翻訳版のために編集されたのであって、原書には掲載されていない場合が少なくありません。

そこで、日本語版はない、ドイツの著名な「ブロックハウス・リーマン音楽事典」で調べてみると、日本人の数は激減する中、武満徹という名が光っています。

### 武満さんの現代音楽

武満徹さんは、現代音楽の覇者として名を成したのですが、その音楽はいわゆる不協和音で耳障りな不安感を抱かせる「現代音楽」とは一線を画しています。

20世紀になって、音楽は耳に心地よい響きから、だんだん違和感のある響きを求め、伝統的な音楽作品上のいわば「起承転結」の期待を裏切るような音楽進行が模索され、「新しい音楽」を求めた作曲家たちがつぎつぎに生まれました。そのような時代潮流の中、武満さんの音楽ももちろん革新的ではあるのですが、響きには独特の透明性が感じられ、コンサートに来る聴衆に「新しい感動」を与えたのです。

### 西洋が憧れた日本音楽

さて武満さんと同じ時代の世界的な作曲家というと、メシアンやジョン・ケージなどですが、とりわけジョン・ケージの実験的なある「作品」は衝撃的な事件を引き起こしました。ピアノの前にずっと座ったまま演奏することなく、聴衆が徐々にざわつく。いわばその騒音を演奏会のコンセプトとしたのです。

## 市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

このような時代の音楽家に共通するのが、斬新な音楽構造、あたらしい音楽素材の模索でした。そこで注目されたのが、西洋人には耳慣れない日本の伝統楽器。武満徹さんの著作に「沈黙、音と測りあえるほどに」があります。武満さんは日本の伝統音楽の「間」、それは西洋音楽における計測可能な休符とは全く異なるもの。出される音と同じ緊張感をもった独自の「間」に西洋の耳が注目しました。

### 武満徹さんの音楽紹介

わが国でも1970年～80年代、数多くの現代音楽の作曲家たちがさまざまな試行錯誤を繰り返しましたが、それらは記録として残されているものの、現在、コンサートレパートリーは数少なく、その中に光るのが武満徹さんの作品です。先ほどのドイツの音楽事典で、武満さんの項目を読みますと、「その才能は日本伝統音楽的な感性とアヴァンギャルド的作曲技法を結びつけ、そこからさらにムジークコンクレート、および音列主義にも関わっていった」とあります。では武満さんはどのような作品を残しているのかを、少しご紹介しましょう。「鳥は星型の庭へ降る」は、1977年サンフランシスコ交響楽団の委嘱作品で、「鳥たちの旋律」と呼ばれる音型が主題となっています。楽器構成はまったく西洋音楽ながら、日本的な感性が聞こえてくると感動をもって大変な評判を呼びました。

そしてもう一曲は、「ノヴェンバー・ステップス」。尺八と琵琶と管弦楽のための作品で、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団125周年記念のために委嘱されたものです。

西と東の異なる音質楽器が織り成す音楽は、それまでに経験されたことのないものと捉えられながらも、武満さん独特の音楽美に多くの人が魅了されてきました。

### バッハとベートーヴェンへの憧れ

さて最後に、このような武満さんが好きな音楽はというと、バッハの「マタイ受難曲」とベートーヴェンの交響曲だど本人が書いています。

音楽評論家の吉田秀和さんとの対談の中で、ベートーヴェンが晩年弦楽四重奏曲を作り終えた時、やっと音楽ができるようになったと言った、という話が出てきます。

そのような境地を目指しながら、自分も創造の歩みを進めている。ホールにたくさん聴衆が居並ぶとしても、本当に聴いてくれている人は一握りかもしれないのだから、自分が納得できるものを作っていくしかない、仰りたいのでしよう。